アンナ・カレーニナ（中村白葉訳、世界文学全集Ⅱ、河出書房）　第八編（p884－885）より

レーヴィンは、機械のそばへ行き、フョードルを押しのけ、自分で穀物をさし入れはじめた。

そのときからもうまもなかった百姓たちの昼食時までぶっ通しに働いてから、彼は殻はこびといっしょに納屋を出て、種子にするために脱穀場に積みあげられていた、刈り取られた裸麦の、整然とした黄色ないおのそばに立ちどまって、話をはじめた。

この殻はこびは、以前レーヴィンが組合組織で土地を貸したことのある、遠い村の者であった。そしてその土地は、今では屋敷番が借用していた。

レーヴィンは殻はこびのフョードルと、その土地のことについて話しこみ、来年はその土地を、その村の物持ちでりちぎな百姓であるプラトーンが、借りないだろうかとたずねてみた。

「値が高いから、プラトーンにゃ手に負えますまいよ。コンスタンチン・ドミートリッチ」と百姓は、汗だらけのふところから、麦の穂をつまみだしながら答えた。

「だって、キリーロフは、ちゃんと払ってるじゃないか？」

「ミチュハー（こう百姓は屋敷番のことを軽蔑して呼んだ）にどうして払えないことがありましょう。コンスタンチン・ドミートリッチ。あの男ときたら、ぜがひでも自分のもうけだけは取りあげるやつだから。あの男にゃキリスト信者だってようしゃはねえ。ところがフォカーヌイチおじ（彼はプラトーン老人をこう呼んだ）、あのひとに、そんな人の生皮をはぐようなまねができますかよ？　人によって貸してやったり、のばしてやったりでさ。とても根こそぎ取りたてるなんてこたあできゃしません。なんていったって同じ人間ですからね」

「いったいどうしてあの男は、のばしてやったりするんだい？」

「そりゃそのつまり、なんでさ　――　人間さまざまだからでございますよ。ある人間は、ただ自分の欲だけで暮らしていて、ミチュハーなんざその口で、ただうぬが腹をこやすことばかりしてるですが、フォカーヌイチときたら、正直まっとうな年よりですからな。あのひとは、魂のために生きてるです。神さまをおぼえていますだよ」

『どういうふうに神さまをおぼえているのだ？どんなふうに魂のために生きているのだ？」

とレーヴィンは、ほとんど叫ぶようにいった。

「わかりきったことじゃありませんか　――　真理にしたがって、神さまの掟(おきて)にしたがって、生きていくまでですよ。だって人間はさまざまですからね。早い話が、おまえさまにしたところで、やっぱり人をいじめるようなことあなさらねえ」

「そうだ、そうだ、じゃ、さようなら！」と

レーヴィンは、興奮のために息をつまらせながらいって、くるりと踵(きびす)をかえして、ステッキをとると、急ぎ足にわが家をさして歩きだした。フォカーヌイチが魂のために、真理にしたがい、神の掟にしたがって生きているといった百姓の言葉を耳にすると同時に、おぼろげであるが、意味ふかい想念(そうねん)が群をなして、今までとじこめられていたところから、急に飛びだしてきたかのようであった。そして、それらの想念は、みな一様に、ひとつの目的に向かって突進しながら、その光で彼の目をくらませつつ、彼の頭のなかでうず巻きはじめた。